

Title	道づれとハインリヒ
Author	菅谷, 恒徳
Citation	人文研究. 7 卷 11 号, p.1183-1201.
Issue Date	1956
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

道づれとハインリヒ

菅 谷 恒 徳

ケラーの「緑のハインリヒ」は、主人公から見れば、一人称の告白小説であるが、十九世紀中頃のスイスとドイツを背景に、興隆期の代表的な小市民の生活が、如実に描かれているという点から見れば、時代小説として好個の見本の一つともいえる。そしてまた「私」という個人が、この時代の社会のるつぽに投げこまれ、何年もの間におし潰されそうになりながら、どうにか再び立ち上つて、けつきよく更生してくるといふ、個人と環境との相剋によつて社会的現実性を把握すべく導かれてゆく、「私」の発展的なこういふ姿は、近代的教養小説の重要な特色であつて、この小説の歴史的意義は、もちろんこの点にかかつてゐる。

現実主義作家の手になる教育的要素の濃厚な発展小説の特色として、「私」はまず、家を取りまく郷里という、近く狭い小さな田環によつて規定される。父母、親戚、友人、教師、恋人など、それらは本来すでに与えられたものであつて、「私」が出会ふべく初めから予定されているのである。一般には自由であり、冒険であると夢みるべき恋さえも、この小説にあつては、必然的に予定され大地から萌えたやうなものであつて、恋人ユーディットのごときは親戚の一員とさえなつてゐるのである。

しかしこの小田環の中にも、思いがけない人間との出逢いが絶無というのではなく、少年ハインリヒの心の旅路としてみれば、やはり秘密を担つた道づれが、少くとも一人はあつたわけで、予定された変哲のない小さな世界にも、作者は偶

然という暗所の余地を設けておくことを、決して忘れてはいないのである。發展小説として主人公をとりまく円環は次の段階において当然拡大されるが、こうなると、「私」は必然を解かれ、自由となり、漂泊の立場にくる。周囲は限界の稀薄な縹渺たる異境であつて、予知しがたいもの、秘密の偶然が大部分となり、見知らぬ路傍の人、かりそめの道づれが、思いがけない意味を担つて、「私」に係り合つてくるかも知れない。狭い必然の世界とは事態は逆になつて、偶然がここでは宿命というひとしお深い必然力で、のしかかつてくることができるのである。道づれはこうして「私」の魂の發展の上に、少からず影響を及ぼすように、作者が重大な意味を遠くからそつと伏せておいた人物、即ち「私」にとつてそういう思いがけない宿命の担い手たちである。

彼らはそれぞれ異つた問題を携えて、「私」との迷いを身を以て実証し、「私」の漂泊の行手に灯をかざすことになつた三つの階梯に立つている道しるべである。第一は金銭の問題をめぐる登り、「私」の發展におけるモラルの主流をなす善悪の臍ろげなる意識を揺り起し、自らは路頭にうち砕かれて亡びてゆく道づれである。第二は「私」との半生の若い夢である芸術の問題を提げて登り、「私」ともども世に敗れることによつて、「私」の現実性の把握に資する道づれである。第三は陰の人物として、「私」のさすらいの途上、久しく行動をともし、暗夜の星のごとき役割をはたす不思議な嚮導であるが、「私」は余りに大切なこの伴侶を、情性のためにとかく忘れがちである。況んやその陰の直ぐうしろに普く光のあることなどはもちろん思いもよらない。しかしこの普き光が、陰との絡み合いや対照の角度の斬新さで不意に怠惰な意識を震撼してやまぬとき、「私」の精神は忽然として覚醒するのである。そしてこの目ざめは、もはや仮初めのものではありえない。なぜなら、「私」は金銭と芸術という余りに切実な、そして余りに美しい夢である、この二つの大きな迷いを通して、すでにかなり時がたつてからである。ともあれ、ここに考察される対象は、金銭の人、芸術の人、導きの人も仮称すべき未完成の像である、これら道づれたちの姿を通じて浮動している、根源的モラル、芸術、理念に関する問題である。

＼金銭の人＼

この小説の背景は手工業制度のなから文化的に向上する小市民社会に移つてゆく過渡期のスイス及びドイツである。庶民の生活は資本主義の進歩とともに、物質的な日常生活への精進を余儀なくせしめ、金銭の魔力が次第に人間を盲目にし、常軌を逸せしめるようになる。未だ守銭奴といつたような典型には至らぬまでも、そういう傾向をおびた人物がこの作品の中にも登上してくる。むしろ典型になつていないだけに、多分に問題性を有し、創造してゆく人間の新しさもあると言えよう。特に告白物語ふうの発展小説という特色からも、そのことは言えるが、ここでは金銭問題に絡んで悲劇に陥つてゆく人間の運命から、同じ問題をめぐる咎とその意識を通じて、覚醒してゆく主人公の精神に、観察の焦点を絞つてみることにする。

ハインリヒにおける自己省察の底流として咎の意識は早くから、次第に習慣的に具つていたのであるが、少年期の終り頃に出逢つた一人の道づれによつて、いよいよ咎と救いの問題として、正面から切実に対決を迫られることになつた。しかしこの意識の基礎的前提には、何よりも先ず、少年ハインリヒを可愛がつていた豪勢な骨董商人マルグレット老夫妻を中心とする迷信家、無神論者、ユダヤ商人らの不思議な寄り合い、この「人間というものの悪魔的な力が余りにもむき出しになつている二人」⁽¹⁾を中心、展開される金と慾との放恣な世界と、キリスト教の教義を基礎とする母親の、ひからびた窮屈な勤儉貯蓄の世界との対立があつたことを、一応顧慮しておくべきで、後者の狭隘な世界さえ、想像力と感受性に富む少年の前には、前者の底知れぬ悪魔的な世界へとかり立てる有力な要素でしかなく、贅沢と自由への媒介者である金銭への魅力は、こうして相対立する背景の両面から力を加えていたのである。

また、そういう背景があればこそ、金銭をめぐつての葛藤、罪悪はひとり大人の世界ばかりではなく、そのまま少年の世界にも行われていたわけである。それどころか、金銭を目的に事を構えんとする情熱、打算、かけひきは、時に大人も顔まけするくらいであることが、大人になりかけている年代のハインリヒと、偶々交渉することになつたマイヤーライン

という少年によつて、ここに立証されるのである。この悪友によるハインリヒへの影響は著しく、「一人の少年の執拗な利己心と、そこから生れてくる憎悪心とに、私はこの年頃としては、めつたに見られないような悲しい苦悩の体験をなめさせられた」と彼自ら述懐しているくらいである。先頃ハインリヒは家の小箱から大きなターレル銀貨を盗み出した経験があるのだが、彼は盗みにたいする悔悟の念よりも、浪費による慾望の刺戟という魅力のほうに、いつそう持続的な支配を受けたようである。「願望が満たされて、怠惰な夢想を誘う隙もなかつたし、金をつかう時の行動の完全な自由さが、勉強の折にも、一種の敏捷さや決断によつて現われたから」⁽³⁾従来よりも却つて勉強ができるくらいであつた。悪童連中の狡猾さも大人に劣らぬものがあつて、金の出所のいかかわしきなど問題ではなく、黙つて悪事に加担もしてくれるし、両替えもしてくれ、甘い汁に与へてしまえば、後は空うそぶいて、われ関せずというふうである。

マイヤーラインは、可愛い感じの雀斑のある顔立の小ぢんまりした、小柄な少年である。努力家で何でも小器用にやつてのけ、特にノートの字には誤がなく、小さな丸味のある数字を整然と書いていた。何よりも取りえといへば、「万事分別くさい批評の網にからんで、その場その場に応じた知慧をひねり出し、物知りぶつた顔つきで、私たちの年頃の考えを凌ぐような、解釈や推測を下す一種の才能であつた」⁽⁴⁾とハインリヒは言っている。彼はその分別でハインリヒの浪費をたしなめ、もつと有益らしく見えることに、注意を向けさせようとするのだが、相手の秘密を黙認していることは言うまでもなかつた。こうして一見、質実で親切らしく見える交際のうちに、彼の打算の網は抜け目なく張られていつた。彼はハインリヒに小さな金庫を作らせ、必要の時には金を立替えて二人の間に貸借関係を結び、例のきれいな数字で貸借簿に日々記入し、幼稚な品物を盛に売りつけ、その額も念入りに書き込み、また、つまらぬ事柄によく零細な金を賭け、それを記すことも怠らなかつた。この関係がしばらく続いたと思う頃には、もはや彼はひとかどの債権者だつたのである。ハインリヒが半ば遊びごとのようにして、続けていた結果も、彼には真剣らしく、彼はよく、負債が重大な体面上の問題であることを説いていたが、ついに或る日、決算書突きつけ、ハインリヒが返済を滞っていると、いよいよこちらの母の許

へ事情を訴えて、返済を迫つたのである。学校で注意点をつけられ、相手と学友たちから、ひどく面罵されたハインリヒの憎しみは、もはや拭うべくもなく、この反目はその後、野外演習における烈しい格闘によつて、一段落つくことになる『私は手足がぐつたり疲れてしまい、昔の友だちを敵にして、せり合つたこの組み打ちによつて、品位を失墜し、肉体までも汚してしまつたような気がした』⁽⁵⁾とハインリヒは言つてゐる。その後は二人の間に、もはや衝突も起らないが、敵意は深く内訌して行く。

その後四年経ち、ハインリヒは十六才、マイヤーラインは十八才になつていたが二人は公の場所で会うと、顔を合せることを避け、相変らず敵意を他人に洩らすことは止めなかつたので、ハインリヒはこういう敵意の危険性を思い、敵のいる同じ市に住んでいることが、空おそろしくさえなつてきた。ところが、思いがけない事件のために、この心配も自然に消滅してしまつた。マイヤーラインは或る日、塔の古い風見を取り外そうとし、経費を節約するために、足場を組まず、自ら急勾配の高い屋根に登り、足を踏み外して忽ち敷石の上に、死体を横たえたのである。ハインリヒはそのとき、偶々附近を歩いていて、その噂を聞き、その刹那はさすがに思わず戦慄を覚えた。とはいへ慈悲や悔恨の情は片鱗だに浮かんで来ないのである。『私の心はずつと引きつづき、しみじみとした暗い憂いに包まれていた。だが如何ともし難い心の奥底では、声高く笑い楽しんでたのだ。彼のもだえ苦しんでいる様や亡骸を目にとめたならば、私もきつと同情や悔恨に打たれたであろうが、敵が一撃のもとに潰えた、という目に見えない言葉は、私にひたすら和解の感を与えた。しかも平和であつて苦痛ではなく、復讐であつて愛ではないような和解なのだ』とハインリヒは告白している。⁽⁶⁾二人の若者の芸術家氣質と俗物性との葛藤ともいうべきものは、前述の如く敵意の内訌によつて当事者自身にも、悲劇の結末を予想せしめるものがあつたのだが作者はついに宿命的な第三の苛烈な自然力によつて、解決させてしまつた。

ハインリヒが金銭を使うことによる満足と完全な自由さとに、怠惰な夢を誘う隙もなく、敏捷さのために勉強さえ捗るというような叙述には、一見非常に健康そうな気力さえ感じられるが、ここで肝心なことは、彼が金銭の魔力にかかつて

軌道を逸脱し、完全に盲目となつてゆくプロセスの機微と、その間にも咎の閃めきによる微妙な心理の交錯がとらえられていることである。つまり彼は途方もなく金をつかうこと、浪費そのものに興味をもつていたので、こうなると最初の動機となつた出来ごころなどは影を消し、小箱に手をつけるときに、必製上やむを得ぬという考と今度限りというような靡ろげな気持が、胸をかすめるにすぎない。そして更に回数を重ねると、もはや見つかるといふ気づかひもなく、前記の通り敏捷の余徳さえ、具つてくるという自覚がくるのである。しかも、「自分のうえにかかつていた目に見えない禍を、ほかの義務遂行によつて幾分なりとも埋合わせよう⁽⁷⁾」というような欲求をうすうすは感じていたのである。母の悲嘆の理由としては、「しつかりした行儀のいい子をもつて有難いと思つていたので、こんなに酷く裏切られた証拠⁽⁸⁾」を見せつけられたこと、及び「生活必需品と換えるために手にする時には、いつも一つ一つの銀貨が母には、殆んど運命の神聖な象徴⁽⁹⁾」であつたことぐらいを指摘するに止め、咎と救いの主要問題に更に目を移して見ると、咎はその意識のなかからこそ救いに移行するという、作者の一つの命題らしいものが、次のような生き生きした叙述となつて表れてくるのである。

「私は言葉もなく佇んだまま片隅を見つめていた。不幸と破滅との感情が、波瀾に富む長い生涯にでもなければ見られないほど、強く荒々しく私の心のなかに渦まいた。しかしその黒雲の間からは、なつかしい和解と解放の火花が、すでにちらちら仄みえていた。ありのままの私のすがたを見つめる母の率直な眼差は、今まで私をおさえつけていた夢魔を払いのけはじめた。彼女のきつい目も私にはありがたく、私の苦しみをゆるめてくれて、私はこの瞬間、母にたいし言いようもない愛情を感じ、それが私の悔悟の情をさし照らして、殆んど幸福な勝利にさえ変えた⁽¹⁰⁾」しかもその間母としては、「憂いの底にせずみ、きびしさを少しもゆるめなかつた⁽¹¹⁾」のである。

マイヤーラインの冷静に計量し、組み立ててゆく霞網の下から、逆に自分が陥る危険な敵意という陥穽の穴があいてくるといふ自然のからくりは、神ならぬ人間の与り知ることではないが、二人の人間の事実的衝突の一点を経て燃焼し去らない敵意は、すでに人間から半ば独立して彼らを引きまわし、もはや人間自身始末しきれない一種の自然力化している

ことを、少くとも敏感な当事者である主人公は何となく悟るのである。それは上昇への極点から下降へ移る一時の停滞のうち、湛えられた一種の圧力として、遠からぬ雪崩や瀑布のごとき落下を、言いようもない不気味さで予感せしめるからである。従つてマイヤーラインの場合のような罪の無反省な一途の構築にあつては、この作者のように苛烈な自然力をかかりて一気に解決するということも、この場合には時宜を得ていることであり、必然力を応用したこの手段による浄化作用の効果は充分であつた。それはまたハインリヒの一貫して流れる各と救いの意識の繊細なリズムのなかで洗われつつ、悪と浄罪とのダイナミッシュな大浪の揺れるハルモニの成果として充分なのである。

ところで金の魔力に繰られる人間の迫る道を追及してやまぬ作者の眼は、飽くまで冷酷に透徹しているのである。といふのは、敵の思いがけない死に一片の祈りをささげながら、胸底ふかく快哉の微笑を禁じ得なかつたハインリヒといへども、この仇敵との交渉によつて、金の魔力の洗礼を受けた影響からは、免れなかつたことを、作者はそれから二年ほど後に、この事件の延長線の上で、いつそう深刻な問題によつて照応せしめているからである。

ハインリヒは風景画に精進していたが、或る日、野外写生で偶然知り合つたレーメルという画家に弟子入りをする。

これは優れた天才肌の絵かきであつたが、やや誇大妄想らしいところのある精神分裂症の傾向をおびていた。ハインリヒは、その病気がかなり進んでからも、芸の道に精進している師匠にたいして、尊敬の念を禁じ得なかつたが、世間は彼を全く理解せず、悪意ある背徳者、或は詐欺師として、必要以上に冷遇していた。ハインリヒは四カ月の稽古で、見違えるほど腕前を上げ、視野も広くなつたのに、月謝が続かないので稽古を止め、ただ交際だけをつづけていた。或るとき彼は月謝の分ぐらいの金の融通を師に依頼され、さつそく用立てたところが、その後先方はそのままパリへ旅立つてしまつた。ハインリヒは自分の腕の上達したことを思えば、その程度の金はむしろ謝礼として、進呈すべきものとも考えられながら、母に多額を強請した手前もあつて、督促状を出すことになる。それが文面はおだやかな言葉で、かなり念入りな悪意の書簡なのである。ところがそんな無理をするまでもなく、金は折返し戻つてきたのである。そのときの書信によつ

て、レーメルは旅先で無一物になり、路頭に迷っている姿がうかがわれ、またハインリヒが後から知つたところによると、レーメルはフランスの或る精神病院に入つて、間もなく消息を絶つたという噂である。

ハインリヒの処置としては、常識的に言つてべつだん恥じるところはなく、いや、むしろ世間は、彼が若輩の身で貸金を無事に取戻した腕前を、褒めているくらいである。しかしそれ故にこそ作者はここで、ハインリヒをあらゆる面から徹底的に自己批判せしめ、どんな自己弁解も許さないのである。純真人、しかも恩師にたいし正義の仮面の下に薄情な忘恩の処置をあえてした罪は明白であるのに、こういう場合、自己弁解の楯にとる常識は極めて堅牢なので、それだけにこれを撃破すべき批判は熾烈でなければならぬのである。じつさい常識というものは時に、甚だ得て勝手に利用されるのである。だから、かつて利慾のために純真な友情を欺いたマイヤーラインの罪を責めた同じハインリヒが、今や主客転倒して、自ら師を欺いた罪にたいし平気でこれを蔽うことさえできるのである。しかしハインリヒは健全な市民的人間に教育されねばならない。ここで迷妄の常識を一応剝脱せしめなければ、彼の前途もまた、マイヤーラインの場合のように絶たれてしまうであろう。この小説の理念はもとより市民への人間教育にあり、ハインリヒもけつきよくは自ら招いた罪の苛責と正面から取りくんでいるが、ここまで辿つてくるまでに長い伏線の設けられていたことを思えば、この問題にたいして課されている比重の容易ならぬこともおのずから想像されるのである。

さて、このレーメルという人物は、絵の師匠という点からすれば、次の「芸術の人」の項に入れるべきであるが、金銭の問題でつまずき、その点に重大な意味がかかつていたので、便宜上ここで述べることになつたわけである。しかもその人間的失格を契機として、主人公に及ぼす影響が度外れて大きく、問題も深刻なので、ここではその意味の稀薄な人間像に触れている余裕はないが、ハインリヒに鋭く響いた問題の要点だけは、闡明しておかなければならない。ハインリヒの告白を通じて極めてこまやかに、絶えず流れている咎と救いという主題の底流は、ここでしばらく、大きなダムのごとく堰き止められ、克明な叙述を得ているのである。世の掟、或は道義への毀損というほどの過失である咎は、おのずから自

分を咎める結果になるのであるが、この咎の意識のなかにこそ、ハインリヒの場合においては、善悪の知慧の根源として、新しい創造の秘密が示現するのである。つまり咎の意識は超自然的な他力によつて解消されるものではなく、自らを咎める過程の深まりのなかにのみ、救いの道は残されている。作者ケラーによつて幼少からこの意識を、大切に育まれてきたハインリヒは、ここでレーメルという大きな試金石によつて、その健全な成長を遺憾なく試みられるのである。彼は懇意な牧師である先生から、この問題でキリスト教徒らしい慰めの言葉をかけられたのが甚だ不服で、その時の「罪びと」とか「お慈悲」というような言葉も、全く見当違いの滑稽な言葉だと言ひ、その根拠として、「私はむしろ至つて無慈悲に、自力で問題と取り組んで解決しようと思ひ、宗教的には全然なく、充分世俗的、法律的な意味で、自分に罪の宣告をしようとしたのである」⁽¹²⁾と言つてゐる。そして更に、良心の苛責の重みを幾分なりとも和げてもらう積りで、彼はユードイットのもとを訪れるのである。

若い寡婦であり、年上の恋人であるユードイットは、いかにも自然力の化身らしく、彼の罪からの彼岸的な救済ではなく、現世的救いの仲介者としての司祭者めいた役を果すことになる。彼女は先ず、彼が若いのによくも恥知らずのことをなしおおせたものと驚き、それこそ人間一人を殺したも同然の結果であるように言い切るのである。そして彼が前非は充分悔いてゐることだから、大目に見てくれるようにと言つてゐるのにたいし、彼女は、「そんなこと何にもならないわ。良心の苛責があんたにはとても滋養になるパンなのよ。私がお許しのバターをつけないパンを一生噛みしめてみることに⁽¹³⁾わ」と答え、そして自分の体験から割り出して、「どうにもならないことは、だからこそ忘れるわけにもゆかない」という見解のもとに、咎の許しを容赦なく拒否する。が、しかし彼女の言葉はすぐその後、「それはそうと残念だけど、あんたが嫌になつたとも思えないわ。また、ありのままの人間を愛していけなかつたら、何のために生きてゐるの？」と⁽¹⁴⁾續いてゐる。これこそはユードイットの自然的司祭者精神とも言うべきものである。それは咎がたわいもなく拒否されたり、それによつて咎の意識のなかで活らく掟が、いつそう毀損されるような方法で、咎を許すのではなく、どんなに厳しそ

に見えても、咎ある人をして咎の实在を承認し、引受けることを余儀なくせしめるのである。しかしそれはこうして導かれた者を、ひたすら罪に帰そうとするのではなく、むしろ彼とともにその苦痛の道を歩もうとするのである。またこのプロセスのなかに、彼はおのずから咎の認識と、掟への意志との閃きを覚えるし、彼のこういう逼迫を知る者は、自分も彼と結びついていることを感じるのである。そしてこの共有の体験のなから、適当にして、且つ正しいと認められた道を現実に歩む力も湧いてくる。ユードイットの答えについて、しみじみ考えた揚句ハインリヒは漸く次のような結論的確信に到達する、「つまり自分の犯した不正の意識を、もはや決して忘れないでいつもありありと心にうかべておくということ、これこそ唯一の可能な償いのように思われたのだ」¹⁶。そして長い自己省察を次のように結んでいる。「レーメルにたいしてしたことを、私は今後決して忘れないだろうし、私に永生ということがあるならば、そのなかまでもそれを持ち運んで行くだろう。それは私の人柄や歴史や本質に属しているものだからである。もしそうでなかつたら、どうしてそんなことが起つたろう。私の生存がますます堪えてゆけるにはできるだけ正しいことを行うように、心がけるよりほかはないのだ」¹⁷。

△芸術の人▽

ハインリヒが芸術の都ミュンヘンで、絵の修業中に出逢つた三人の画家たちは、それぞれ固有の性格と体験とをもちながら、いずれも芸術と生活との矛盾という問題をめぐつて、市民的人間修養の途上にあるハインリヒの前途に、少からず示唆を与えている点で興味を惹かれる。自然観や描写の技法において、彼に多大の影響を与えた師匠レーメルが、その優れた才能にも拘らず、亢進した精神病のため、ついに芸術を放棄するに至つた運命については、前項においてすでに述べたが、主人公が芸道に身を投じて間もなくして、遭遇する師匠の悲劇的末路は、ハインリヒの芸術的前途に投げられた暗い前兆のごとくであつた。

ハインリヒは次に二人の道づれとして画家、エリクソン及びリースと知り合いになる。エリクソンはスカンディナヴィ

アの血をひいた裕福な航海業者の息子で本来、画家などになるべき人間ではなかつた。無責任な小学校の教師におだてられて、いつの間にか絵かきらしく仕込まれていたが、才能は或る限界まで来ると、もはや一步も前進しなくなつた。頭でかく画家ではなく、腕でかく商売人であることを自ら悟り、精いつばい励んでいるし、また自分の能力を検討し、最も単純な風景画家として甘んじている。そして生活のできるだけの金が入れば、忽ち画具をすてて、狩獵に出かけ、一年の大半を都塵の外に暮している。その仕事熱心と、美しい顔と、陽気と真摯さは、アトリエの誇りでこそあれ、必ずしも眞の画家でなかつた彼が、早晩、芸術の道に背を向けるであろうことも、ほぼ想像ができた。謝肉祭における仮面舞踏会の準備の頃から知り合つた大商賈の未亡人と恋に陥つて以来、いよいよ方向は決定し、間もなく彼女と相携えて本當の商人に転向してしまつた。

リースはオランダ人であるが、瘦せ型の中背で、髪も眼も黒く、愛嬌のある微笑をうかべた口元や、眼に一種の憂愁の色がうかがわれた。その部屋には美術家の住まいらしい気配は少しもなく、学者か政治家の部屋らしく、大きな書棚には稀観本や初版物も見え、壁には絵や習作ではなく、地図がかけてあつた。彼は高い教養と思想的根柢の上に立つて、イタリーの巨匠たちにも学び一流のドイツ素描家の域に達しているほどの本格的な画家である。思想的には無神論者、生活的には耽美派で、幾人かの女性を、次々に手なづけてきた形跡があつたが、エリクソンの愛人である未亡人ロザリーエとの係り合を動機にハインリヒと衝突し、激論の末、決闘の場面にまで立至つた。この果合はリースの気転により、悲劇的結果を招かずに中止され、彼はそこで飄然と旅に出たが、その後、故郷に歸つて代議士に立候補することになる。

これら三人の画家はそれぞれ、自分の到達しうる芸術活動によつて満足するには、余りに人間的に豊かであり過ぎたのである。その達しうる限度に来ると彼らは芸術と人間的生活との矛盾という問題に逢着し、ついに芸術を棄てて実務に着かざるを得なかつた。レーメルにあつては精神的破綻によつて、芸術放棄後やがて消息を絶つてしまつたが、エリクソンとリースとの場合において、その辺の事情が明瞭に看取される。二人とも物質的の生活の基礎に不安を持たない点が重要な

共通点で、後者のほうが教養が高く、頽廢的な性格である点の相違或は前述の画風の相違などはここでは第二義的のものである。ハインリヒもこの二人の轍を踏んで、やがて芸術を放棄して、政治生活に入ることになるのであるが、後者にあつては二人の先輩の場合と、事情がかなり異つてゐる。二人の陥つた袋小路、問題性は、ハインリヒの場合ほど痛切に意識されているのではない。つまり彼ら裕福者たちの転向は、物質的強制というものを知らず、従つて意識の面からも、人生觀的にも深いものではなく、いわば自然発生的なものであり、やや気まぐれでさえある。エリクソンは意識的に浅い処世人であるが、一本気で画道に精進しながら、いかにも苦闘している言動から、彼の転向は技法の問題の延長として、予想されないでもなかつた。しかしリースに至つては、思想画の背景である多年の技術的円熟の点から見ても彼の無神論的な世界觀に基く恋愛論や画論についての、名論卓説から見ても、その転向振りはいささか軽い感じを免れていない。

ハインリヒの画道からの敗退は、先ず直接経済的な動機から來てゐることが注目される。彼は異境の空にあつて、幾日も飢餓線上をさまよひ、僅かな持物を売り尽し、飢えを凌ぐことも束の間であつた。そんな状態の中で偶々、公女奉迎の祝祭用旗竿塗りのアルバイトで、その日その日の糊口を凌ぐ手仕事を覚え、これによつて芸術を、中断せざるを得なかつたのである。ここで注意すべきことは、近代芸術の職業としての困難性という問題が、前面に押し出していることで、主人公はぎりぎりの最後の一線まで追いつめられて、芸術か生活かの対決を迫られたのである。その後故郷への旅路で、自分の絵を骨董屋から買い上げてくれた恩人であり、フォイエルバッハの使徒である伯爵に逢つて、芸術の修業をなおも続けることをすすめられた時、ハインリヒは自分の決心が、もはやその日を凌げばいいという願ひ以上に、深い所に根ざしていることを告白する。こうして作者は主人公の芸術からの敗退を人間の一種の心の悲劇として取扱うわけである。つまり、小さな風景画家を住まわせるには、大きすぎる頭なのだから、職を変えるのもいいが、現在の職を諦めるにしても、自由意志で諦めるべきで、惨めに敗走するような恰好では面白くないように、伯爵は言うのである。また實際ハインリヒは伯爵の館に滞在してゐるうちに、なお二枚の絵を仕上げ、これまでの長い間の芸術の中絶や、色々の経験、絵

を諦める心構えなどによつて、物を見る眼も一段と高く自由になり、この間にフォイエルバッハの世界観を身につけ、伯爵の養女ドロテアとの交際によつて人間的にも成長し、内外ともに自由の身となつて、ここに漸く遍歴の生活を閉じるとともに、青春時代の贅沢な夢である芸術愛好心を諦めることを決意し、政治的実践の生活に入るべく、帰郷の途につくのである。即ち彼の転向は、その根源において、物質的強制というのつびきならぬ動機に根ざしているとともに、長い間にわたる幾階梯もの魂の修業の後に、初めてなされた必然の成果なのであつて、この点が前二者の場合と著しく違つているのである。

次に精神異状者である師匠レーメル、性格的無神論者であるリースのごとく、彼らの芸術家的人間としての問題性と呼应して、エリクソンとハインリヒの場合には、両者の芸術そのものから危険な性向が胚胎していたことが注目されるのである。エリクソンは前述の通り、精神のない画工、つまり悪達者な職人的技巧から一步も出られず、そのことに多少甘んじてもいたのだが、問題は主人公の場合いつそう深みに入りこんでいると見られる。ハインリヒの画法についてはエリクソンの反語的な讃辞をかりれば、「最も美しく抽象化された勤勉そのもの」となり、えたいの知れぬ無意味な思想画に墮しているのである。その末期の作品と制作振りについては彼自身の告白にも「こうして毎日仕事を始めようとする度に、ほんやり物思いに耽りながら引きつづけた線が、その無駄がきとつながり、だんだん際限のない織物みたいにつづいて、やがてその怪物は巨大な灰色の蜘蛛の巣のように、画面の大部分を蔽つてしまつた。だが、もしも人あつてこの絵を仔細に観察するなら、そこに極めて称讃すべき脈絡や勤勉さを発見したことだろう。つまりそこには延べ数千マイルにも及ぶ直線や曲線の連続で、一つの迷路が作られていながら、しかも最初の一点から、最後の一点までを辿ることができたからである」とあるのみならず、更に「もしもこの無意味な寄木細工をかくに用いられた注意力や効果や忍耐を、全部ほんとうの制作に向けたとしたら、私はきつと見ごたえのある作を生んだに相違ないのだ」とさえ言い、自分の作の芸術に遠いことを悟り、そして「ただ、ところどころに大なり小なりの筆蹟の淀みがあるのは私のとりとめのない悲しい心の漂泊の

結ばれともいえようし、またその窮地から逃れようとする慎重な筆づかいは、夢みている意識がその網にどれほど捉われていたかを証明しているのだ²⁰とわずかに自ら慰めているだけである。そして自分の絵の一枚々々が今は味気のない無駄なものに思え、いろいろ詮索してみても心に忍びこんだ灰色のものの原因を捉むことはできず、それどころか惻々として孤独の感さえつけ加わつてくるのである。そしてその孤独の感情がここに新たな問題として取上げられるのである。その分析は単純にはできないが、芸術そのものの自壊に基く内心からの空白感、異境にある者の本来からの寂漠感が先ず考えられ、更に根源をたずねれば彼が幼少にして、父を失つた孤児であるという点も見逃せぬであろう。しかしそれらの事はただ一応あげておくだけで、ここではもつと直接的な要素である二人の先輩リースとエリクソンとの芸術からの脱落、同時にその縁浅からぬ二人の道づれの自分からの流離という、二重の分離によつてわが身も崩れてゆくようなつびきならぬ虚脱感だけで孤独感の全貌が蔽われていると見て差支えないだろう。じつさいハインリヒは、リースの脱落の噂やエリクソンの転向の告白を思い起すと、「今度は私までぐらつき出し、ドイツ内部の強固な大部隊にも、或る意味ではまさると思ひこんでいた三人の辺境ゲルマン人が、鑢屑のように脱落し、ばらばらになつて、誰もがおそらく永久に会うことができなくなつてしまつたのだ²¹」と畏縮して悲しまざるを得ないのである。

ハインリヒの生来の孤独性は異境への漂泊を通じて、ひとしお空白感を以て滲透していたが、今また芸術の危機に加えて、二人の修業の伴侶との流離という痛手によつて、もはや耐え得ぬまでに強められた。即ち二人の彼にたいする影響は、芸道への示唆や人生觀的感化等により、その道の先輩たちのなし得るありふれた類のものではなく、却つてその道の進行を阻止する結果になるくらいにひたすら人間的交渉により感化を強めたのである。新生への門出に当り別れの挨拶に立寄つたエリクソンが、ハインリヒの思想画に長い讃辞を呈した後、その厚紙を拳骨で突き破り、迷路からの抜け穴を示したのも唐突のことではなかつた。但し二人の影響は彼をして芸術放棄を最後の決定せしめたのではなく、芸術放棄への心構えを余儀なくせしめる一つの契機となつたのであつて、両者の芸道からの離脱の違い方については先に述べた通り

である。

△導きの人▽

「この小説は色々の点で、ゲーテの「ウィルヘルム・マイスター」やロマン派の長篇に比較されるのであるが、象徴の扱い方、挿話の置き方といった構成の問題に関しては、同日の論ではない。ロマン派の小説並に「マイスター」においては、象徴は往々にしてアレゴリー化し、こわ張つた感じを招いて、興を殺ぐのであるが、これは知的な普遍性を個別のものに具象化しつつ、全体の有機性を保つために、些細なことも不用意に行わしめない周到な意力を、本来欠いているからである。原因による事件の発展、動機による心理の推移など、その一つ一つを苟もゆるがせにしないケラーにあつては、エピソードの挿入という問題は殊の外慎重に行われている。決定版においては幾つかの挿話が新たに加えられたが、それらはただに叙事詩的内容を豊富にしているばかりでなく、更に芸術的な光度を高めるといふ二重の効果をおさめ、決定版の価値をいよいよ不動ならしめているのである。象徴的な意味で異色あるツキーハンと、路傍の恋を取扱つたフルダとの二つの挿話が、ここで問題になるのだが、両者の関聯性を特に注意しなければならぬ。

アルベルトゥス・ツキーハン は、父ツキーハンと内妻であるオランダ女との間に生れた息子であるが、母には先夫との間に一子ヒエローニムスがあつて、母はこの方を可愛がり、結局これを法律上の養子にきめてしまった。養子は成人すると家出をし、アルベルトゥスはこの兄の死を夢に見て、これを事実と信じ、彼の名をとつて自らヒエローニムスと偽称し、相続権を自分のものにし父の故郷へ帰る。ここで彼の前に二人の恋人、洗濯女コルネーリアと、幻影のような信女アフラとが現われるが、彼は手近なコルネーリアをさし措いて、アフラの後を追ひ、ヘルンフト教団に入り、遠い処へ遍歴をつづけているうちに、結局アフラは幻となつて消えてしまふ。絶望の果てに再び帰国してみると、死んだと思つた養子は、コルネーリアを妻として遺産を現実に相続し、ツキーハンは無一物となり、なお惨めなことにコルネーリア達二人の下男として引取られる。

これは二元論者の辿る悲惨な運命の一例で、ハインリヒのユーディットとアンナとにたいする二重愛の原型であるのみならず、また、郷に居て確実な生計の道を求めることをせず、若き日の芸術家気質という影を追つて、ひたすら流浪する主人公ハインリヒの運命を、象徴するものであることはもちろんで、しかもこの物語は単に挿話として、一箇所に挟まれているだけで終つてしまうようなものではない。

ハインリヒは絵を習うようになってから間もなく、自分のアトリエの裝飾品或は人体研究の手引として、一つの髑髏をもつていて、これを芸術修業の殆ど最後近くまで、いたる処、遍歴の道づれにしているのであるが、この頭蓋骨こそ外ならぬ、前世の哀れな二元論者アルベルトウス・ツキーハンの変容せる姿なのである。これは作者自らシュトルムに宛てた書簡の中で、「自らの本質或は人柄を喪失せせる人間のやや明瞭にすぎたアレゴリーにして典型」と言つて²²⁾いるが、意味と実用との統一において極めて特異な存在である。それは主人公が日頃芸道にあつて腕を磨くための道具でもあれば、また主人公の修業の半生に同行して、暗夜にも進路を教えてくれる無言の嚮導である。例えば時には対話の材料にもなり、或は自己反省の糧にもなり、また、時には茶番的一幕の役者にもなり、破局にあつても余裕を生みだす種となつて、自己詮索によつて限りなき教訓を作り出す契機を与えてくれたりする。こういう意味ぶかい風変りな道づれがつき添つているために、また形式的な面から見ても、大きな叙事詩的流れのうちに、一種微妙な陰影の生動を感じせしめ、一つの不思議な魅力となつて見逃せない。

フルダは公女奉迎の祝祭の夜、ハインリヒと知り合つた十七才の縫い子であるが、その時すでに二人は顔見知りであつた。ハインリヒが旗竿塗りのアルバイトをしている同じ処で、旗縫いをしていた女工なのである。その場面は或る河岸の酒場兼舞踏場で、晩夏の星月夜に、祝祭の吊提灯も見え、川面にはその影を映している。「軽い小さな帽子の下から、こぼれ出している柔かな鳶色の髪や、白いシヨールが風にひらめく度びに、ちらつく若い胸の明るさなどと、数え上げる」と、彼女の場合は貧困の陰に、裕福な人たちの望んでも得られない数々の魅力の宝が、秘められているように思われた。

蒼白いように記憶していた顔色さえ、今は、光のたわむれを受ける地肌として役立ち、或るときは風にゆらめく提灯の赤みがかつた仄めきが、その上にちらちら映つたり、或る時は川の銀青色の反射がかすめたりし、また物を言うたびに、口元に微笑がうかんで、神秘の気を漂わせたりした。それに彼女の名はフルダ⁽²⁴⁾というのだつた⁽²⁵⁾。

手足のしなやかなこの娘の体には、熱い生命が息づいていて、それが彼女に近づくとすべてのものに、献身的な好意となつて現れるかに見え、謎のような優しさがその身うち溢れ始めても、偽りの媚びや品の悪さは気配すら感じられなかつた。しかし僅か十七才という若さにも似ず、その小さな胸の中には、すでに二人の恋人が住んだことがあつたが、五年前から天涯孤独の身で、彼女の生きる唯一の情熱といえ、ただ仕事と恋以外には何も無い。仕事は自分の父母であり、恋をしないくらいなら死んだほうが増しだと考えている。

若く傷つき易い身の上で、仕事と恋一筋に生きる情熱や、いかにも自覚のある気さくなこの娘の言葉に、ハインリヒの心は乱れがちであつたが、その一面また彼女は古い伝説の世界からでも来た人物らしく見え、珍しい花でも持つような工合に、固有の道徳律を手にしている女でもある。大気が凝り固つて現実の優美の女神が生まれ、あたたかい血の通つた体で、自分の腕に抱かれているように、ハインリヒには思えるのである。勿論これは路傍の恋らしく、やがては別れることになるのであるが、その場合にも、以前の男たちの場合のように、何のさし障りもなく、また不断の生活に戻つて行けるという安心もあつたわけである。

このエピソードは単に叙事詩的な内容を豊富にするためというよりも、ハインリヒが人間性の幅を大きくしなければならぬ一つの生活的危機に直面し、それを克服しつつある過程に挿入されて、その効果を上げたという、極めて時宜を得ている点に、いつそう大きな意味がうかがわれる。つまりハインリヒは貧困と闘いつつある難儀な生活のどん底で、「突然、芥やひからびた苔の下あたりに隠れていたように、人知れずきらめきちらついていた明るい生活の悦びに溢れた泉、いわば黄金のような魅力をもつた豊かな宝石の前に立つた⁽²⁶⁾」のである。そして「貧乏な連中というものは、華やかな騎士

などの思いもよらぬところに、自分たちの間で、ヴェーヌスの山を拵えているのだ⁽²⁷⁾」ということをつくづく考え、また「そのすばらしきを見出すには、自分で貧乏になつてみるより外はなさそうだ⁽²⁸⁾」とも悟るのである。

もう一つこのエピソードの挿入され方として目につくのは、それがハインリヒと旅を共にする鬻餓ツキーハンの活躍している章の間に介在していることである。これはフルダとツキーハンとの挿話の意味が、表裏一体である本質から来ていると考えられる。ツキーハンとは昔、幻を追つてインドからスイスへ行き、さらにグリーンランドへ行つて、またそこから戻り、今は鬻餓となつてまで、空しい流浪をつづけているが、これは確実な現実足場を置かぬ二元論的考えから生じた幻覚による迷いであつて、こういう果てしない迷いとは逆の方向に向つて、幻覚を一枚剥いだその直ぐ裏に、即ち無窮のなかにではなく極めて手近な処にこそ、真実の光フルダはひそんでいたのである。ハインリヒは飢餓という外的強制によつて、日傭取りの労働を通じ、一人のかりそめの職人として、庶民の生活を覗くことになつたが、フルダという光によつて庶民の積極的な真実の姿を知り、その方向への本来の針路を示されたのである。「誰でも眼をしば叩きながら上方を見て、天の上に自分のようなものがあると思ふのは愚かだ。しつかり大地を踏まえて周りを見るがいい。有能な者は世界は隠し立てをせぬ。何も永遠の境をさまよう必要はない。認識したほどのことは手に入るのだ⁽²⁹⁾」とはゲーテのリアリズムの結論であると同時に、フォイエルバッハ哲学の出発点⁽³⁰⁾でもあり、また、その唯物論の使徒たる伯爵の洗礼によつて、ハインリヒはこの小説の最後近くにきて、久しい間の神との対決から解放され、人間性の成熟を見るに至るのであるが、その結末にくる道程の一里塚として、愛すべきこの挿話によつて、その教えを、予め体験せしめて置かれたことも決して偶然ではない。

ハインリヒが語る「私」の魂の発展に關聯して、その漂泊の途上に偶々出逢つて道づれとなつた人物たちの、それぞれの問題については今まで述べてきた通りであるが、本稿としてここにわざと保留せざるを得なかつた最後の道づれ、及び道づれ自体の問題について一言触れておきたい。最後の道づれは伯爵とその令嬢ドルトヒエンであつて、この二人と「私」

との出逢いについては、すでに「人文研究」第六卷第一一号に述べてあるのでここでは重複を避けることにするが、「私」はこの邂逅を契機として、生活上並に人生観上大きく転換を来すのみならず、伯爵の館に滞在していたために「私」が招いた母親の死という取りかえしのつかぬこの宿命的な過失を通じて、各の問題としての根源的モラルの主題は再び高音を以て奏でられ、ここでは「子供を損つた」と思ひこんでいる母親の懺悔と絡んで、ひとしお哀切の音色をひびかせつつ、悲劇的帰趨への必然性を強調している。次に道づれそれ自体の問題についていえば、作者がこういう道づれのごとき挿話的人物を長篇小説の重要な部署においたことは、彼が後に粹入短篇作家として新しい境地を開きながら、一方「マルティン・ザランダー」を以て、もう一度本格的時代小説を世に問うて、遂に成功しなかつた事実と照し合せても、この作者の短篇作家の本質の問題として残り、また、優れた叙事詩的形能力を以てしてもなお彼を、本格的社会小説から、告白的私小説、或は粹入短篇小説に転ぜしめた社会的事情の問題として残るので、この点については、稿を改めて述べなければならぬ。

註

- | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----------------|------|---------|------|-----------------|------|-----------------|------|-------------|------|---------|------|---------|
| (1) | I 卷 7 章 (I の 7) | (2) | I の 14 | (3) | I の 14 | (4) | I の 14 | (5) | I の 15 | (6) | I の 15 | (7) | I の 15 |
| (8) | I の 14 | (9) | I の 14 | (10) | I の 14 | (11) | I の 14 | (12) | III の 6 | (13) | III の 6 | (14) | III の 6 |
| (16) | III の 6 | (17) | III の 6 | (18) | I (21) III の 15 | (22) | 一八八一年四月一日 | (23) | IV の 8 | (24) | 優美の意 | (25) | III の 6 |
| (26) | IV の 5 | (27) | IV の 5 | (28) | IV の 5 | (29) | ファウス、一一四四三一一四四八 | (30) | フォイエルバッハの著書 | (31) | IV の 15 | | |
- 「不滅性の問題」はゲーテのこの詩節の上に説き起し、死滅性の信仰を展開している。